ing Kyo

古典の日

五

黒羽

奥の細道

松尾芭蕉

黒羽の館代浄坊寺何がしの方に音信ル。思ひがけぬあるじのよろこび、日夜語つゞけて、其弟桃翠など云が朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて、親属の方にもまねかれ、日をふるまゝに、日とひ郊外に逍遥して犬追ものゝ跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。それゟ八幡宮に詣。「与市宗高扇の的を射し時、別てハ我国氏神正八まんとちかひしも、此神社にて侍る」と聞バ、感応殊しきりに覚らる。暮れバ桃翠宅に帰る。

修験光明寺と云有。そこにまねかれて、行者堂を拝ス。

夏山に足駄をおがむ首途哉

旅の無事を祈る気持ちは昔も今も変わらない。「夏山に」の句が彫られた石碑（栃木県大田原市黒羽田）

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集②『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

那須野の奥の俳人兄弟

芳賀徹さん　とたずねる　おくのほそ道　5

芭蕉と曾良は裏見の滝を見物すると、その午後には黒羽へと向かって十六里、那須野の原に分け入った。『おくのほそ道』には収めなかったが、野中の径では秣負ふ人を枝折の夏野哉との句もある。夏野の遠くを農夫が背負ってゆく秣ばかりが目じるしだという。この句を「今日の西洋の水彩画にも似る」と評して英訳したのが、明治の日本学者B・H・チェンバレンだった。野中で草刈りする人に馬を貸して貰い、その人の可愛い子供二人が芭蕉らを慕って後を追いかけてくるところなど、まことに詩的風情に富む。

翌日、矢板、大田原をへてようやく大関氏一万八千石の黒羽の町についた。城代浄法寺図書高勝・俳号秋鴉また桃雪と、その弟翠桃の歓迎ぶりはなみなみならぬものだった。「思ひがけぬあるじの悦び」と芭蕉は書くが、芭蕉の別号桃青に照らしてみても、二人は江戸で蕉門に連なったに違いなく、師の来訪を待ちこがれていたのだろう。「日夜語りつづけて」というのがいい。「朝夕勤訪らひ」も「親属の方にもまねかれ」もいい。師を敬愛する兄弟のもてなしぶりが彷彿とする。これも紀行には入れなかったが、「秋鴉主人の佳景に対す」と題した

山も庭もうごき入るや夏坐敷

の名句は、芭蕉からの謝意をこめた挨拶。新緑の山なみも庭前の草木もみな薫風に乗って流れこんでくるかのような広い座敷―日本人誰しもの憧れの住まいだ。

この歓待があり、梅雨どきということもあって、芭蕉と曾良は黒羽に四月三日から十六日まで長逗留した。その間にも謡曲「殺生石」の狐の化身玉藻御前の塚をというのを訪ねたり、那須与一ゆかりの八幡宮に詣でたり、那須野ヶ原にもしきりに古事を探った。役行者を祀った修験道の光明寺に招かれたときには、那須の高峰から常陸にかけて青々と連なる夏山のかなたに、これから行く陸奥の空を望んだ。役行者が高足駄で峰々を踏破したように、さあ自分らも出発だ、と芭蕉の心は勇躍したのである。

現代と変わらぬ人間の心

古典と私

俳優 児玉　清 さん

源氏物語の凄さを初めて肝に銘じたのは、ドイツ文学を学びたくて大学に入って暫く経ってからのことだった。

文学の歴史をたどっていくうちに、ふと気付いたのが物語文学としての「源氏物語」の抜きん出た輝きであった。11世紀にかくも華麗なる美しい物語が世界に先駆けて日本に誕生していたことに、今更のごとく賛嘆し、目くるめくような誇らしさに興奮したことを覚えている。

しかもこの物語は、人間の心の襞を、男と女の愛の機微を心憎いまでに肌理細かに活写しているばかりか、自然を賞でる豊かな感受性、月を眺め、雲の流れ、風の流れに心を寄せ、川の流れや移ろいいく季節に人生を重ねる。その自在に言葉を駆使して人間の物語を構築し紡ぎ出す逞しい想像力と高い知性に心底畏敬の念を抱いたのだった。

現代を生きる人間と少しも変わらぬ、悩み苦しみ考える、共通の人間がいた。こうした喜びが、さらに現実のものとなったのは、藤原定家の直筆になる一文を目のあたりにしたときだ。なんと人間味溢れる素敵な字なのだろう。それまで無縁に思えた古典との距離が一挙に縮まり、初めて生きた人間同士といった温もりを感じたのも、この瞬間だった。

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

頼政自刃の地「扇の芝」

文学ウオーク

宇治市・平等院にある「扇の芝」

「扇の芝」をご存知でしょうか。

宇治平等院表門を入り、少し左へ歩を進めると、扇の芝の旧跡があります。『平家物語』源氏揃えの巻で　源三位頼政の自刃したといわれる場所です。頼政77歳の時でした。後白河法皇の第二皇子以仁王の令旨を受け平家打倒の檄をとばしました。治承4(1180)年、宇治川を挟み、権力に驕れる平家に立ち向かった頼政方はわずか500。平氏方2万8千の兵士に追われた頼政が最後を迎えた旧跡です。

辞世の和歌「埋もれ木の花咲くこともなかりしに　身のなる果ぞ悲しかりける」

歌人であり鵺退治の説も伝えられる文武とも優れていた老将頼政はどのような気持ちでこの歌を詠んだのでしょう。後世、昭和の歌人佐々木信綱は「まねきけむ扇の風に起こりけり　木曽やまおろし伊豆の浦風」と詠み、摂関政治の貴族の時代から武士の世に向かう一つの転機となり、彼の死が無駄ではなかった事を讃えています。

雅やかな平等院の中の軍扇を形どった三角形の芝は霊が宿ると云われています。この前に立ち、私達は頼政自刃のときの老将の心を想い、静かに古を偲びたいものです。

（ＮＰＯ法人・都草　横井礼子）

親しむ